

町医者だより

平成31年04月号
原発事故後の行く末

<発行・お問合せ先>

おおわだ内科呼吸器内科

院長 大和田 明彦

市川市南八幡4-7-13

シャポール本八幡2階

JR本八幡駅南口(シャポール改札口)

2分ミスタードーナツ並び

ヘアサロンAsh向かいビル2階

電話047-379-6661

おおわだ
内科
呼吸器内科

2011年3月11日の東北大震災に引き続き起こった福島第一原発事故による放射線物質被曝は現在も続いておりこれから何世代も影響が残ります。最近、福島第一原発との関連は分からないと慎重を期していますが日本国内で乳児の複雑な心臓奇形の手術件数が増加しているという論文(J Am Heart Assoc. 2019;8:e009486)が掲載されました。平成最後の町医者だよりはこの論文に関連したお話です。

複雑な先天性心臓奇形が増加

2007年から2014年までの統計で2011年から1歳未満の乳児で複雑な心臓奇形手術例が14.2パーセント増えているという事です。この論文を目にした時、私を含めて来る時が来たと感じた方が少なからずいらしたと思います。以前月1回市川市内の公立幼稚園に産業医巡視で訪問していたのですが原発事故後しばらく経って巡視した際に幼稚園の先生が放射線測定器で測定すると園庭で針がかなり振れて特にスベリ台の下で数値が高かったと言っていました。市川市も放射能汚染されていたのです。その時はピンと来なかったのですが、事の深刻さが少し分かったのは2015年に出版された「終わりなき危機-日本のメディアが伝えない、世界の科学者による福島原発事故研究報告書-ブックマン社」を読んでからです。衝撃的だったのはその本の中に示されたウェブサイトの画像です(出版社はその画像を使用したかたようですが断られたようです。Overview of the NARAC Modeling During the Response to the Fukushima Dai-ichi Power Plant Emergencyというタイトルでhttp://www.ral.ucar.edu/events/fukushima/documents/Session1_Briefing3-Sugiyama.pdf となっていますが何故かすぐ見つけにくくなっています)。

赤い帯であらわされた放射能の雲(プルーム)が関東にも到達した画像です。翌日降った雨がヨード131やセシウム137による関東圏、恐らく西日本にまで及ぶ土壤汚染を引き起こしました。それも深刻ですがもう一つの深刻な事は特に子供たちが放射性物質を身体の中に取り込んでしまった事で内部被曝を受けた事です。先の本を見ると、発がん率の上昇以外に先天性奇形、特に脳神経系の奇形の増加、精神障害の増加、セシウムの心臓への集積による心臓疾患の増加と甲状腺への集積が高いことが語られています。ヨード131も甲状腺に集積したはずですので甲状腺癌の増加は避けられないと思います。福島県もそう考えているからこそ福島県立医大に主に甲状腺を診る内科・外科を充実させたのだと思います。先の産業医巡視の際に別の方の著書にあった安全デマ(安全です、安心です)に騙されてはいけないとも伝えていたことも思い出しました。誰が悪いとかを議論することよりも冷静に医学的立場で事の成り行きを注視していく必要があります。そして、これからの日本を担う若い世代の行く末が明るい事を願わずにはられません。

Fukushima Release: 2011-03-14 21:00 UTC

